

【佳作】

しみわたる水

岩沼市立岩沼中学校

三年 加藤 悠

あの日の水の味を、私は忘れない。

夏の午後、部活の練習が終わったあとだった。グラウンドの照り返しで、息をするのも苦しいほど暑かった。Tシャツは汗でびしょぬれ。頭がぼうつとして、足がふらついた。私は水筒のふたを急いで開けて、中の水を一気に流しこんだ。

その瞬間、身体の奥まで冷たさがしみわたるのを感じた。のどを通して、胸のあたりまで、水が通っていくのがわかった。ただの水なのに、まるで生き返るような気がした。思わず、

「うまい…」

と声が出た。

それまでは、部活後の水なんて「あたりまえ」だった。水筒を持っていたのも、親に言われるからで、自分では特別に感じていなかった。でもあの日だけは違った。水が「おいしい」ではなく、「ありがたい」と思った。帰宅後、祖母に「今日の練習きつかった」と話すと、祖母が水道の前で言った。

「そんなときの一杯は、体にもしみるよね。でもね、あんたが飲んでもこの水も、ただじゃないんだよ」

私は、「ただの水道水なのに？」と聞き返した。祖母は続けた。

「遠くのダムから、ろ過して、消毒して、パイプを通してここまで来るのよ。水道が止まったら、一気に生活できなくなるんだから」

たしかに、私は水道が止まった経験がない。蛇口をひねれば水が出る。それが普通だった。けれど、「あの日の一杯」がきっかけで、私はその

「普通」がどれほどありがたいことを知った気がした。

学校で理科の授業中に習った「水の循環」を思い出した。海、空、山、川、地下。そして人の手を通して家へ。水は地球をめぐるっている。その流れの中に、自分ののどをうるおした一滴があると思うと、自然と人とのつながりが感じられて、不思議な気持ちになった。

ニュースでは、世界のどこかで水不足や干ばつの話が出る。歩いて何キロも水をくみに行く子どもたち。にぎった水しか飲めない地域。そういう場所では、「あの日の一杯」どころか、「水そのもの」が手に入らないのだ。私は、たった一度の水筒の水から、そんな世界のことまで考えるようになった。

それ以来、私は水を残さなくなった。コップに注ぎすぎた水も、残さず飲むようになった。菌みがきのときに水を止めるようにもなった。誰にも言われなかったけど、自然とそうしたくなった。水が命だと、身体でわかったからだ。

今でも、暑い日の水はうまい。けれど、そのおいしさの奥に、私はいろんなものを感じる。水をつくってくれる自然の働き。水を届けてくれる人の手間。私たちが水を守らなければならない理由。

「水を大切にしよう」という言葉は、よく聞く。でも私にとっては、それはポスターに書いてあるスローガンではない。あの日飲んだ水の冷たさが、何よりの答えだった。